

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 30 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21592862

研究課題名（和文）

東アジア圏域の家族の扶養意識と高齢者介護の社会化に関する研究

研究課題名（英文）

A study of Filial Responsibility and socialization of elderly care in East Asia

研究代表者

太湯 好子（FUTOYU YOSHIKO）

岡山県立大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：10190117

研究成果の概要（和文）：

高齢者人口が欧米に比べ急激に増加している東アジア地域では、要介護高齢者をどのように支援するかが課題となっている。そこで要介護高齢者を支援する方策への示唆を得ることをねらいとし、高齢者介護の整備状況の異なる日本、韓国、中国の今後の介護の担い手となる大学生とその親のデータを用いて介護意識の社会化への家族内資源の関連を検討した。その結果、介護に関する社会的資源が整備されることによって、社会的資源に依存した形で介護意識が社会化されていくことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

A rapid increase in the elderly population has been a greater issue in Asian countries compared to European countries and the United States. This report aimed at clarifying the relationships of family care resources to socialization of care consciousness. Data was obtained from university students and their parents in three different countries: Japan, South Korea and China, where the home care system for elderly persons has developed to varying degrees. Findings suggest that care consciousness should be socialized according as the society is provided with elderly care resources.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学，地域・老年看護学

キーワード：地域看護学，老年看護学

1. 研究開始当初の背景

東アジアの地域に位置する日本は高齢化が急速に進んでいる。そして高齢化の進行速度は、老年人口割合が 7%～14%になる倍加年

数をみると、韓国と中国においても、日本の 24 年より短かく^{1,2)}、今後高齢者介護をどのように担うかは東アジア圏域において共通の課題と言える。同時に、東アジア圏域は西

洋とは異なる儒教による共通の精神文化をもち、老親扶養は子による扶養を基調とする特別な文化を有している。しかし日本、韓国においては、高齢者世帯の増加、女性の社会進出³⁾などにより家族は機能的、構造的に変化が生じている。また中国においては65歳以上人口割合は7.8%⁴⁾であるが、1979年の人口抑制政策施行以降に生まれた子が結婚世代を迎え、日本、韓国と同様に家族は機能的、構造的に変化している。加えて、国民の老親扶養に対する意識は変化し始めていることが指摘されている^{5,6)}。このことは老親の介護を考えると、3ヶ国とも見過ごすことのできない事実であると同時に、家族機能の重要さも否定できない。したがって、家族介護と介護の社会化ニーズの関係を介護の社会化の進展に応じて考えていくことは喫緊の課題と言える。

2. 研究の目的

本研究は、上記課題を踏まえ、東アジア圏域（日本、韓国、中国）における、今後の介護の社会化の推進に伴う家族支援への示唆を得ることをねらいとし、高齢者介護の社会制度の整備と家族内資源の、介護意識の社会化への関連を明らかにすることを目的とした。具体的には高齢者介護の社会制度の整備状況による介護意識の社会化の比較、および介護意識の社会化に家族凝集性が手段的および情緒的扶養意識を介して関連すると仮定した因果関係モデル（図1）を実証的に検証することとした。

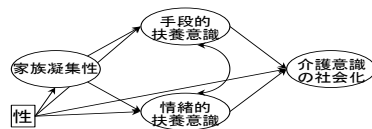


図1 研究モデル

3. 研究の方法

(1) 調査期間

2008年9月～2010年12月。

(2) 調査内容

- ①基本的属性として、性、年齢、きょうだい数、家族員数を調査した。
- ②介護意識の社会化
介護意識の社会化はその質問項目が開発されていないことから「ys1. 老親が介護を必要とする状態になったとき」「ys2. 将来、自分が介護を必要とする状態になったとき」「ys3. 家族の介護について」と独自に3項目の質問を設定した。回答は「できるなら家族で世話をしたい」（家族内資源）、「できるなら家族と病院・施設を利用して世話をしたい」（家族内資源と社会的資源）、「できるなら病院や施設で世話をしてほしい」（社会的資源）の選択肢より回答を求め、0～2点で得点化した。

得点が高いほど介護意識の社会化が高いことを示すようにした。

③家族凝集性

家族凝集性はOlson⁷⁾らの凝集性と適応性の二次元からなるFACESⅢのうち凝集性の10項目を用いた。なお日本語版は貞木ら⁸⁾により翻訳されたもの（「yc1. 相談のある者は、家族の誰かに話を聞いてもらう」「yc2. 家族と一緒に自由な時間を過ごすことが好きである」「yc3. 私達は、家族で一緒にすることをすぐに思いつける」「yc4. 私達は、家族で何かをするのが好きである」「yc5. 家族のまとまりが、とても大切である」「yc6. 私達は、お互いの友達を受け入れる」「yc7. 家族は、お互いに助け合う」「yc8. 家族は、他人よりもお互いに親しみを感している」「yc9. 家族で何かをするとき、全員が集まる」「yc10. 家族のだけれど、お互いに強い結びつきを感じている」）を使用した。回答は5件法で、得点が高いほど家族凝集性が高いことを示す。

④老親扶養意識

老親扶養意識は研究者ら⁹⁾が開発した簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度で測定した。この尺度は手段的扶養意識（「yi1. 老親が生活費に困らないように、子どもが経済的に援助するのは当然である」「yi2. 子どもは老親の病気の治療費・入院費・福祉サービス利用料を負担するべきである」「yi3. 子どもは老親に旅行や趣味活動の機会を用意してあげるべきである」「yi4. 老親が介護を子どもに要求するのは当然である」と、情緒的扶養意識（「ye1. 別居していても、老親には消息を伝えたり、聞いたりする交流を忘れてはならない」「ye2. 成人しても、子どもは老親と定期的に団欒する時間が必要である」「ye3. 子どもは老親の健康状態やその変化にいつも注意してあげるべきである」「ye4. 子どもは老親が困った時には、いつでも親身に相談にのるべきである」）から構成される。回答は5件法で得点が高いほど老親扶養意識が高いことを示す。

(3) 調査方法

調査は無記名自記式により行った。調査票はまず日本の医療保健および社会福祉の分野の研究者間で協議し、日本語版を作成した。次いで韓国、中国の日本の大学院に留学経験のある共同研究者が韓国語および中国語に翻訳した。その後再度、日本語に翻訳し、内容に統一性を持たせるために研究者間で検討した。調査は日本、韓国、中国のそれぞれ2大学の大学生とその親を実際の調査対象とした。

(4) 倫理的配慮

大学生へは、それぞれの国の研究者（調査員）が文書および口頭で研究の趣旨と権利保

障の説明を行い、回収ボックスへの投函をもって同意を得たものとした。親へ調査協力は大学生を経由し文書にて依頼した。調査への同意は調査票の返送を持って得たものとした。なお岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

(5) 解析方法

本研究では世代(大学生とその親)と国(日本, 韓国, 中国)とに分割した6群で, 家族凝集性が老親扶養意識を介して介護意識の社会化に関連すると仮定した因果関係モデルへのデータの適合性を構造方程式モデリングを用いて検証した。なお実際の解析では性を統制変数として投入した。

解析に先だって, 測定尺度の因子モデルの構成概念妥当性を構造方程式モデリングによる検証的因子分析により検討した。なお因子モデルがデータに適合しない場合は, 項目の圧縮を試み, 項目間の相関係数が0.3以下あるいは0.7以上の組のいずれか一方の項目を任意に削除し, 再度因子モデルへのデータの適合性を検討した。なお介護意識の社会化は3項目で因子モデルが飽和モデルとなっていることを考慮して, データへの適合性はパス係数の有意性に着目して因果関係モデルの検討のなかで確認するものとした。測定尺度の信頼性は内部一貫性に着目し, Cronbach's α 信頼性係数で検討した。上記解析は最尤法を用い Amos17.0 により解析した。

次に, 介護意識の社会化, 家族凝集性, 老親扶養意識の得点比較を6群で一元配置分散分析により検討した。また老親扶養意識の下位因子である手段的と情緒的扶養意識の比較はt検定により行った。上記解析は SPSS 17.0 により解析した。

最後に, 介護意識の社会化に家族凝集性が老親扶養意識を介して関連すると仮定した因果関係モデルへのデータの適合性は構造方程式モデリングにより検討した。なお介護意識の社会化が3件法のカテゴリカルデータであることを考慮して推定法はWLSMV法を用いM-Plus5.21で解析した。

モデルのデータへの適合性の判定には, 適合度指標CFIならびにRMSEAを用いた。CFIは0.9以上RMSEAは0.08以下であればモデルがデータによく適合していると判断される¹⁰⁾。

4. 研究成果

(1) 対象者の基本的属性

対象者の性別は3カ国の大学生と親ともに男性に比べ女性が多かった。平均年齢は大学生は20.3~22.5歳, 親は47.1~50.8歳であった(表1)。きょうだい数は日本の大学生と親および韓国の大学生は2人が最も多く, 韓国と中国の親では, 4人以上が最も多かった。

中国の大学生では対象となった大学生のすべてが一人っ子政策以降に生まれた者ばかりであり, 一人っ子が最も多かった(表2)。家族員数は日本では5人以上, 韓国では4人, 中国では3人が最も多い状況にあった。

表1 対象者の基本属性

		日本		韓国		中国	
性 人(%)	大学生	男	198 (31.1)	214 (46.4)	259 (27.0)		
		女	438 (68.9)	247 (53.6)	700 (73.0)		
	親	男	173 (47.0)	228 (49.6)	332 (47.0)		
		女	195 (53.0)	232 (50.4)	375 (53.0)		
年齢	大学生	20.3±1.3(18-28)		22.5±2.2(19-29)		20.8±1.3(17-29)	
平均±SD(範囲)	親	50.8±4.2(37-65)		50.5±5.0(35-68)		47.1±4.1(38-72)	

表2 対象者のきょうだい数と家族員数

	きょうだい数				
	1人	2人	3人	4人以上	
日本大学生	39 (6.1)	326 (51.3)	240 (37.7)	31 (4.9)	
日本親	58 (15.8)	147 (39.9)	125 (34.0)	38 (10.3)	
韓国大学生	27 (5.9)	284 (61.6)	126 (27.3)	24 (5.2)	
韓国親	10 (2.2)	32 (7.0)	64 (13.9)	354 (77.0)	
中国大学生	490 (51.1)	297 (31.0)	103 (10.7)	69 (7.2)	
中国親	33 (4.7)	64 (9.1)	126 (17.8)	484 (68.5)	
		家族員数			
		2人以下	3人	4人	5人以上
日本大学生	11 (1.7)	50 (7.9)	223 (35.1)	352 (55.3)	
日本親	1 (0.3)	17 (4.6)	124 (33.7)	226 (61.4)	
韓国大学生	78 (16.9)	127 (27.5)	168 (36.4)	88 (19.1)	
韓国親	42 (9.1)	64 (13.9)	203 (44.1)	151 (32.8)	
中国大学生	106 (11.1)	425 (44.3)	267 (27.8)	161 (16.8)	
中国親	29 (4.1)	342 (48.4)	202 (28.6)	134 (19.0)	

単位: 人(%)

(2) 各測定尺度の回答分布及び因子構造の構成概念妥当性と信頼性の検討

① 家族凝集性の因子構造の構成概念妥当性と信頼性の検討

家族凝集性10項目1因子モデルの適合度はCFIが0.813~0.953, RMSEAが0.091~0.167であり, RMSEAは0.1を超え許容水準になかった。このため, 項目を削減する方法で修正した。項目間の相関係数が0.3以下の組はなく, 0.7以上であった4組からそれぞれどちらか一方の項目(「yc3. 私達は, 家族で一緒にすることをすぐに思いつける」「yc4. 私達は, 家族で何かをするのが好きである」「yc7. 家族は, お互いに助け合う」「yc10. 家族のだれもが, お互いに強い結びつきを感じている」)を削除した。4項目を削除した修正版家族凝集性の1因子モデルのデータへの適合度はCFIが0.960~0.999, RMSEAが0.016~0.085の範囲にあり, 統計学的に許容水準にあると判断した。なおCronbach's α 信頼性係数は0.763~0.889であった。

② 老親扶養意識の因子構造の構成概念妥当性と信頼性の検討

手段的と情緒的扶養意識の2因子斜交モデルの適合度は, CFIは0.949~0.988, RMSEAは0.051~0.093であり統計学的に許容水準にあると判断した。なおCronbach's α 信頼性係数は, 手段的扶養意識が0.732~0.848, 情緒的扶養意識が0.722~0.896であった。

(3) 介護意識の社会化と家族凝集性, 老親扶養意識の国と世代による比較

①介護意識の社会化の国と世代による比較

介護意識の社会化の回答分布を表3に示した。日本と韓国の大学生と親の回答はすべての質問について「できるなら家族と病院や施設を利用して老親の世話をしたい」(家族内資源と社会的資源)との回答が最も多かった。中国の大学生と親の回答は「yc1. 老親が介護を必要とする状態になったとき」「yc2. 将来、私が介護を必要とする状態になったとき」と扶養の対象を明示した質問については「できるなら家族で老親の世話をしたい」(家族内資源)との回答が最も多かった。しかし「yc3. 家族の介護について」と扶養の対象を一般化した質問の回答は、韓国や日本と同様に「できるなら家族と病院や施設を利用して老親の世話をしたい」(家族内資源と社会的資源)との回答が最も多かった。

国に着目してみると、大学生の介護意識の社会化は、中国に比べ、韓国と日本が有意に高かった。親では、中国、韓国、日本の順で有意に高かった。世代に着目すると、日本は大学生が親に比べ有意に低かったが、韓国と中国では世代による有意差はなかった。(表4)

表3 介護意識の社会化の回答分布

			家族			家族と病院・施設			病院や施設		
			人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
ys1. 老親が介護を必要とする状態になったとき	日本	大学生	105	(16.5)	472	(74.2)	59	(9.3)			
		親	25	(6.8)	282	(76.6)	61	(16.6)			
	韓国	大学生	125	(27.1)	297	(64.4)	39	(8.5)			
		親	124	(27.0)	242	(52.6)	94	(20.4)			
	中国	大学生	570	(59.4)	214	(22.3)	175	(18.2)			
		親	463	(65.5)	122	(17.3)	122	(17.3)			
ys2. 将来、私が介護を必要とする状態になったとき	日本	大学生	92	(14.5)	376	(59.1)	168	(26.4)			
		親	10	(2.7)	243	(66.0)	115	(31.3)			
	韓国	大学生	63	(13.7)	291	(63.1)	107	(23.2)			
		親	84	(18.3)	244	(53.0)	132	(28.7)			
	中国	大学生	577	(60.2)	228	(23.8)	154	(16.1)			
		親	447	(63.2)	153	(21.6)	107	(15.1)			
ys3. 家族の介護について	日本	大学生	90	(14.2)	461	(72.5)	85	(13.4)			
		親	23	(6.3)	292	(79.3)	53	(14.4)			
	韓国	大学生	44	(9.5)	341	(74.0)	76	(16.5)			
		親	70	(15.2)	285	(62.0)	105	(22.8)			
	中国	大学生	340	(35.5)	594	(61.9)	25	(2.6)			
		親	267	(37.8)	405	(57.3)	35	(5.0)			

単位 人(%)

表4 介護意識の社会化の国と世代による比較

	大学生	p ^{注1)}	親	p ^{注1)}	p ^{注2)}
日本	3.0±1.2(0-6)		3.5±1.1(0-6)		**
韓国	3.0±1.2(0-6)	**	3.1±1.5(0-6)	**	ns
中国	1.8±1.4(0-6)	**	1.7±1.5(0-6)	**	ns

国と世代に分割した6群での一元配置分散分析 Sheffe法

注1)国による比較

注2)世代による比較

** : p < 0.01

ns(non significant) : p > 0.05

②家族凝集性の国と世代による比較

家族凝集性の得点比較を国に着目してみると、大学生の家族凝集性は、日本が韓国、中国に比べ有意に低かった。親も大学生と同様に、日本は韓国、中国に比べ有意に低かった。世代に着目してみると、韓国と中国では世代による有意差はなかったが、日本では大学生は親に比べ有意に低い値を示した。(表5)

③老親扶養意識の国と世代による比較

老親扶養意識の得点比較を国に着目してみると、大学生では、中国、韓国、日本の順に有意に低かった。親も同様に、中国、韓国、日本の順に有意に低かった。世代に着目すると、いずれの国も大学生が親に比べ有意に高かった。

手段的扶養意識と情緒的扶養意識を比較では、中国の大学生を除く5群では、手段的扶養意識は情緒的扶養意識に比べ有意に低かった。(表6)

手段的扶養意識を国に着目してみると、大学生では中国、韓国、日本の順に有意に低かった。親も大学生と同様に、中国、韓国、日本の順に有意に低かった。世代に着目すると、いずれの国も大学生が親に比べ有意に高かった。

情緒的扶養意識を国に着目してみると、大学生では日本が韓国、中国に比べ有意に低かった。親では、日本と韓国が中国に比べ有意に低かった。世代に着目すると、日本では世代による有意差はなかったが、韓国と中国では大学生が親に比べ有意に高かった。(表7)

表5 家族凝集性の国と世代による比較

	大学生	p ^{注1)}	親	p ^{注1)}	p ^{注2)}
日本	14.0±5.9(0-24)		15.4±4.7(0-24)		**
韓国	18.8±3.8(0-24)	**	19.7±3.7(0-24)	**	ns
中国	18.4±4.9(0-24)	**	18.9±5.0(0-24)	**	ns

国と世代に分割した6群での一元配置分散分析 Sheffe法

注1)国による比較

注2)世代による比較

** : p < 0.01

ns(non significant) : p > 0.05

表6 老親扶養意識の国と世代による比較

	大学生	p ^{注1)}	親	p ^{注1)}	p ^{注2)}
老親扶養意識					
日本	25.4±4.5(0-32)		21.6±5.3(6-32)		**
韓国	27.8±4.1(13-32)	**	24.9±5.1(3-32)	**	**
中国	31.0±2.5(12-32)	**	29.3±4.3(5-32)	**	**
手段的扶養意識					
日本	11.2±2.9(0-16)		7.7±4.0(0-16)		**
韓国	13.1±2.7(3-16)	**	10.8±3.8(0-16)	**	**
中国	15.5±1.3(4-16)	**	14.3±2.7(2-16)	**	**
情緒的扶養意識					
日本	14.1±2.5(0-16)		14.0±2.6(0-16)		ns
韓国	14.8±2.1(6-16)	**	14.1±2.4(0-16)	**	**
中国	15.5±1.4(3-16)	**	14.9±2.2(0-16)	**	**

国と世代に分割した6群での一元配置分散分析 Sheffe法

注1)国による比較

注2)世代による比較

** : p < 0.01

ns(non significant) : p > 0.05

表7 老親扶養意識の国と世代による比較

	大学生	手段的	情緒的	p値
日本	大学生	11.2±2.9	14.1±2.5	**
	親	7.7±4.0	14.0±2.6	**
韓国	大学生	13.1±2.7	14.8±2.1	**
	親	10.8±3.8	14.1±2.4	**
中国	大学生	15.5±1.3	15.5±1.4	ns
	親	14.3±2.7	14.9±2.2	**

t検定

** : p < 0.01

ns(non significant) : p > 0.05

(4) 介護意識の社会化への家族凝集性と老親扶養意識の関連性

国と世代とで分割した6群での、介護意識の社会化に家族凝集性が手段的および情緒的扶養意識を介して関連すると仮定した因果関係モデルへのデータの適合度は、CFI=0.968~0.995, RMSEA=0.019~0.069であり統計学的許容水準を満たしており、モデルは実証的に検証された。(図2)

日本の大学生と韓国と中国の大学生と親では家族凝集性は手段的および情緒的扶養意識に正の関連があった。日本の親は家族凝集性は情緒的扶養意識に関連していたが、手段的扶養意識には関連していなかった。

手段的扶養意識は6群すべてにおいて介護意識の社会化に関連していなかった。情緒的扶養意識は日本と韓国の大学生と親では負の関連があったが、中国の大学生と親では関連がなかった。

介護意識の社会化に情緒的扶養意識が関連していた。日本と韓国の大学生と親に着目すると、介護意識の社会化への家族内資源(家族凝集性、老親扶養意識)の影響を寄与率でみると、大学生では日本は $R^2=0.142$ であり、韓国の $R^2=0.377$ に比べ小さな値を示した。親では日本は $R^2=0.128$ 、韓国は $R^2=0.122$ であり同程度であった。

以上の結果は、高齢者介護の社会化が進展することによって、手段的のみならず情緒的な老親扶養意識の低下が家族凝集性の低下を背景に深化することを意味している。高齢者介護の社会化は、本来、要介護高齢者を介護する家族員の介護負担の軽減をねらいとするものであるが、それがいわば家族の紐帯を崩壊させかねないリスクがあることを意味している。このような家族の情緒的な関係性の崩壊が、社会的介護サービスが整備されても精神的な介護負担感は軽減しておらず、減らない高齢者虐待や所在不明高齢者問題を引き起こしているとも考えられる。要介護者への手段的介護の代替をすることで介護者の負担を軽減することも重要である。それに加え、介護者と要介護者間の関係性の維持や肯定的な関係性の構築を意図した家族介護者への直接的介入も必要である。さらに介護保険制度施行後も家族の介護を理由に離職する者は減少していないことから¹¹⁾、介護役割を新たに担う家族の生活の再構成に対する支援体制の整備が期待される。

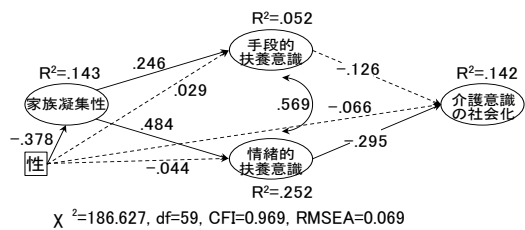


図 2-1) 日本大学生

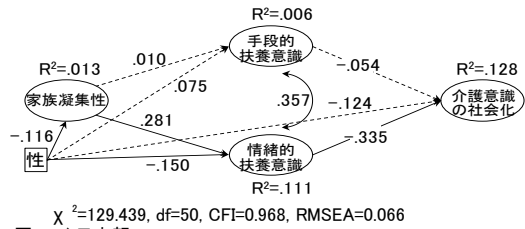


図 2-2) 日本親

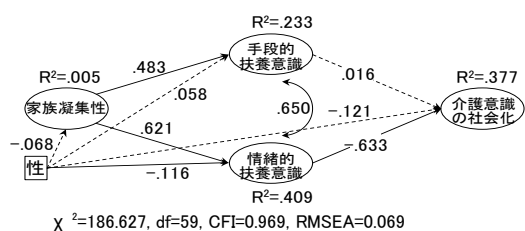


図 2-3) 韓国大学生

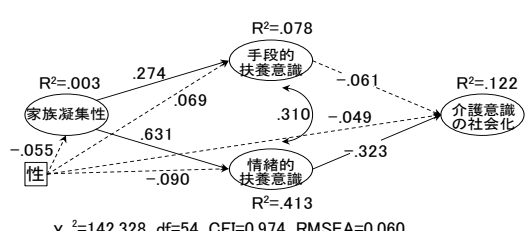


図 2-4) 韓国親

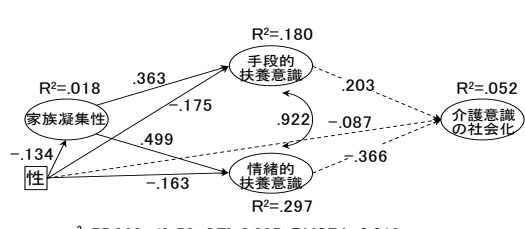


図 2-5) 中国大学生

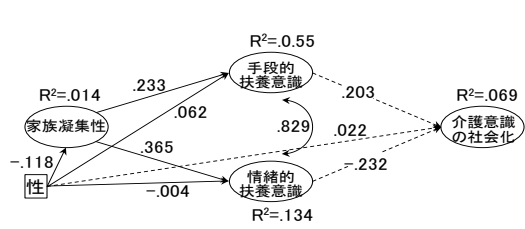


図 2-6) 中国親

参考引用文献

- 1) 吉田茂良：東アジア圏域の高齢者社会研究. 保健の科学, 47 (8), 2005, 556-558.
- 2) 金貞任：韓国の介護保険制度の導入. 保健の科学, 47 (8), 2005, 576-583.
- 3) 介護保険制度の実施モデルの最終報告,

- 韓国保健福祉部, 2005. 3. 30.
- 4) 趙偉偉: 中国の社区における高齢者ケア—介護保険制度の可能性についての一考察—. 保健の科学, 47, 2005, 584-558.
 - 5) 丁珂, 谷口幸一, 郭新彪, 島田博祐: 大学生の高齢者扶養意識の現状と今後の課題に関する研究—日中比較調査—. 東海大学健康科学部紀要, 12, 2006, 51-63.
 - 6) 張燕妹: 中国における高齢者扶養意識の研究—北京市の若者に対する意識調査を通して—. 社会学論叢, 3, 2003, 81-101.
 - 7) David H Olson, Joyce Portner, Yoav Lavee: Faces III. Family Social Science, University of Minnesota, 1985.
 - 8) 貞木隆志, 榎野潤, 岡田弘司: 家族と精神健康—OlsonのFACESIIIを用いての実証的検討—. 心理臨床学研究, 10(2), 1992, 74-79.
 - 9) 實金栄, 太湯好子, 桐野匡史ら: 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の開発. 20(1), 2010, 189-195.
 - 10) 山本嘉一郎, 小野寺孝義編著. Amosによる共分散構造分析と解析事例. ナカニシヤ出版, 2008.
 - 11) 内閣府. 平成22年度介護保険制度に関する世論調査. <http://www8.cao.go.jp/survey/h22/h22-kaigohoken/index.html>, アクセス2011.8.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- (1) 太湯好子, 實金栄, 桐野匡史, 竹田恵子, 高井研一, 中嶋和夫: 家族凝集性と老親扶養意識が介護の社会化意識に与える影響. 日本保健科学学会, 査読有, 13(1), 2010, 31-41.
- (2) 實金栄, 太湯好子, 桐野匡史, 竹田恵子, 高井研一, 中嶋和夫: 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の開発. 川崎医療福祉学会誌, 査読有, 20(1), 2010, 189-195.
- (3) Skae MIKANE, Masafumi KIRINO, Yoshiko FUTOYU, Kazuo NAKAJIMA: Influence of Family Cohesion and Sense of Filial Responsibility on Viewpoints Regarding Socialization of Elderly Care in East Asian Countries. Kawasaki Journal of Medical Welfare, 査読有, 17(1), 2010, 37-50.
- (4) 柳海民, 张明, 周霖, 實金栄, 太湯好子, 中嶋和夫: 中日大学生乃父母的贍养意识. 东北師大學報, 査読有, 253, 2011, 140-145.
- (5) 實金栄, 太湯好子, 中嶋和夫, 柳海民, 张明, 李春玉, 郑玉荣: 中日大学生护理

社会化意識的影响因素. 东北師大學報, 査読有, 253, 2011, 146-152.

- (6) 實金栄, 太湯好子, 近藤理恵, 桐野匡史, 中嶋和夫: 日本とドイツの大学生の家族内資源と介護意識の社会化の関係. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 査読有, 18, 1-10, 2012.

[学会発表] (計3件)

- (1) 實金栄, 太湯好子, 桐野匡史, 竹田恵子, 高井研一, 中嶋和夫: 簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度の開発, 第23回看護研究学会中国四国地方会, 2010.03.07, 香川.
- (2) Sakae MIKANE, Yoshiko FUTOYU, Kazuo NAKAJIMA: Relation between Viewpoints toward Socialization of Elderly Care, and Family Cohesion and Filial Responsibility in East Asian Countries, 14th East Asian Forum Nursing Scholar, 2011.02.12, Korea.
- (3) 李志嬉, 中嶋望, 太湯好子, 桐野匡史: 在宅高齢者の健康生活効力感と健康生活習慣の関係に関する日韓比較, 10th International Conference of Korea Studies, 2011.08.23, Canada.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太湯好子 (FUTOYU YOSHIKO)
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号: 10190117

(2) 研究分担者

中嶋和夫 (NAKAJIMA KAZUO)
岡山県立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号: 30265102
實金栄 (MIKANE SAKAE)
岡山県立大学・保健福祉学部・助教
研究者番号: 50468295
桐野匡史 (KIRINO MASAFUMI)
岡山県立大学・保健福祉学部・助教
研究者番号: 40453203
竹田恵子 (TAKEDA KEIKO)
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授
研究者番号: 30309611

(3) 連携研究者

高井研一 (TAKAI KENICHI)
岡山県立大学・名誉教授
研究者番号: 20295827